平成 28 年度(2016 年度)イサザ資源の現況把握調査結果

孝橋賢一・井出充彦・大山明彦・寺井章人

１．目　的

イサザは、琵琶湖漁業の重要な漁獲対象魚種であると同時に、資源量が大きく増減することが知られている。このため各生活史段階において、資源状態を評価しておくことは資源状態が変動した時に、その原因を検討し、対策を考える上で非常に有益である。そこで産卵、仔魚、稚魚にいたる各段階において目視または採捕調査を行った。

２．方　法

4 月下旬から 7 月下旬にかけて、琵琶湖北湖の数か所において、イサザの生活史段階ごとに目視・採集調査を行った。すなわち潜水目視による保護親魚数および産卵床数、多層曳き網の 10 分間曳網による着底前の浮遊仔魚、小型沖曳き網による稚魚の採捕調査を実施し、各段階での資源状況を評価した。

３．結　果

産卵調査

2016 年 4 月 25 日および 5 月 9 日に海津大崎地先において、湖岸距離 30m の観測測線 1 本当たりの保護親魚数および産卵床数を調査したところ、平均 209 尾(2015 年 265 尾)、平均 164 床(2015 年 107 床)であり、それぞれ 2010～2012 年までが平均 9～29 尾、平均 6～13 床と比較すると、2013 年以降平均 80～409 尾、平均 54～224 床に増加しており、2016 年も高水準にあると考えられた。しかし 2016 年調査時に確認された産卵床の死卵率についてみると、これまでが 30～50%程度であったのに対し、2016 年は平均 81.4%と高かった。

仔魚採集調査

2016 年 5 月 26 日、6 月 7,28 日に海津大崎地先および塩津地先において多層曳網の約 1.5 ノット 10 分間曳網による仔魚採捕を行ったところ、多くが 5 月 26 日、6 月 7 日の水温 10～20℃層で採捕され、6 月 28 日には、ほとんど採捕されなくなった（図 1)。

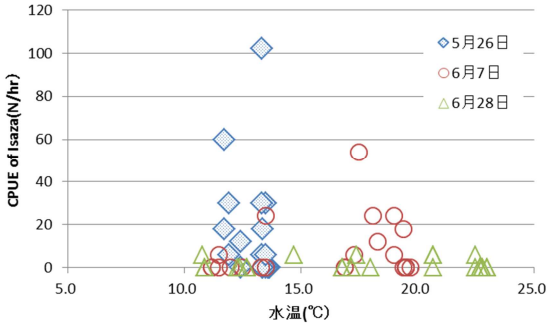

図　1　多層曳網による仔魚採集尾数と水温の関係

稚魚採集調査

2016 年 7 月 5 日および 7 月 25 日に彦根沖および長浜沖の水深 20m で小型沖曳き網による採捕調査を実施したところ、1 曳網あたり平均約 53 尾採捕され、そのうち当歳魚は平均 3 尾であった。2015 年では平均約 246 尾採捕され、うち当歳魚 120 尾であったことから考えて、2016 年の稚魚の発生は少なかったものと考えられた(図 2)。

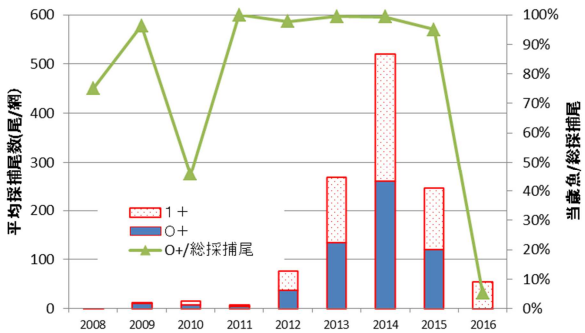

図 2　小型沖曳網によるイサザの採捕尾数の年変動